

がどれ程信用し得るものか——華陽國志の記事が全面的に信用できぬことも勿論であるが——考察が欲しかった。その他水經注や山海經の利用にあたっては、文獻學的な處理があらばと感ぜられる。

著者は又地下遺物で文獻史料を補ひ、さらにそれでも足りぬ所を、マルクスやスターリン或いは毛澤東の言葉を引用して埋めようとする。これも十分考えられる所ではあるが、却って本書を圖式的なものにしてしまったようで惜しまれる。既成の理論によりかかりすぎているのである。この事を敢て文字通りの望蜀の歎として筆を措く。

一九七九年四月 四川人民出版社

A5判 一七七頁 圖版八頁 古

代巴蜀示意圖一葉

## 池田溫著

### 中國古代籍帳研究——概観・録文——

礪波護

ある國のある時代の社會經濟史研究の進展は、關連文書・資料を

網羅した信賴するに足る史料集の編纂・刊行がなされてきたか否かにかかっていると云えよう。唐代中國の社會經濟史研究の場合、このような史料集の編纂・刊行は、中國社會史論戰をへた一九三〇年代半ばになって、陶希聖氏の主導のもとに開始されたのであった。

陶氏主編の『食貨半月刊』が上海の新生命書局から創刊されたのは一九三四年十二月、すなわち本誌『東洋史研究』の創刊に先立つこ

と僅か十箇月の時期であり、それと並行して尨大な『中國經濟史料叢編』の編纂・刊行が計畫され、まず『唐代篇』から實行に移されることになった。この『中國經濟史料叢編』が時代順によらずに、まず『唐代篇』から着手されたのは、編纂者の人数が限られていて、全時代を同時進行するのは不可能だったし、最初の試験的な成果を挙げるには、現在に残された經濟史料の分量が、それ以前のに比べて豊富であり、それ以後のに比べると少ない唐代を選ぶのが適當だと判断されたからであった。

陶希聖氏らを主導者とし、鞠清遠・武仙卿氏らを輯録者とする、この『唐代經濟史料叢編』は全部で八冊からなり、その構成は（一）土地法令、（二）土地問題、（三）寺院經濟、（四）唐代之交通、（五）唐代之都市、（六）工商業與貨幣、（七）動盪中的唐代經濟、（八）財政制度、とされたが、これらのうち『土地問題』『寺院經濟』『唐代之交通』の三冊が出版された段階で、不幸にも日華事變が勃發し、残りの五冊は殘念ながら陽の目をみずに中斷されてしまったのであった。本誌第二卷第六號（昭和十二年八月）には、さっそく『唐代之交通』が森鹿三氏により、『土地問題』が宇都宮清吉氏によって、それぞれ批評・紹介せられた。しかし『寺院經濟』は紹介されることはなかったのである。

（この機會に、いささか脇道にそれるが、一九七四年に臺北の食貨出版社から復刊されたこれら三冊について言及しておきたい。

『食貨史學叢書』の一として出版されたB6判の『唐代寺院經濟』は、扉裏にみえる「本書編校發行經過」に「一、中華民國二十五年至二十六年 國立北京大學法學院中國經濟史研究室編輯 二、中華民國二十六年五月 國立北京大學出版部印刷裝訂因七七

事變未得發行 三、中華民國六十三年一月 原主編人陶希聖重校畢由食貨出版社印行」とあるように、新組みの活字版であり、A5判の『唐代土地問題』と『唐代之交通』の兩書は、扉裏に「中華民國二十五年至二十六年 國立北京大學法學院中國經濟研究室編 中華民國二十六年六月 國立北京大學出版組印未發行

中華民國六十三年四月 食貨出版社複印發行」と書かれている通り、影印版である。出版直後に本誌上で批評・紹介された『土地問題』と『唐代之交通』が實は未發行だったとする今次の出版説明は解しがたいが、それは兎も角として、兩書が、原著のほぼ忠實な影印版であることは確かである。しかし、活字版の『唐代寺院經濟』の場合は、今次の出版説明を鵜呑みにすることはできない。今では稀覯本の部に屬する原著の本文は一六〇頁からなる。

ところが、今次の復刊の底本にされた原本では一三五頁以下の、唐の武宗と後周の世宗による廢佛關係の史料を網羅した部分がちぎれて亡くなっていたらしい。すると目次とも合わないので影印版というわけにもいかず、一三四頁までの部分を新たに組み直した活字版として出版せざるをえなかったであろう、と推察されるのであって、その上、原著に挿入された「唐長安寺觀一覽圖」や「皇唐崇岳少林寺碑」の拓本寫眞などの圖版十二枚もまったく復元されず、原著の面目を大いに失なわせる結果を招いてしまっている。

陶希聖氏らによって計畫された『中國經濟史料叢編』唐代篇八冊のなかに、當時すでに唐代の社會經濟史研究に利用され始めていた、敦煌出土の戸籍の類を集録する冊が含まれていず、既刊の各冊にも部分的な移録さえなされていないことに注目しなければなら

い。實は、陶希聖氏らは、これらの戸籍の類の重要性を無視しないし、輕視されたのではなかった。これらの文書が、外國の探檢隊によりそれぞれの國に持ち去られてしまつて直接に整理することが不可能であつた當時の實狀に鑑み、戸籍に關する完璧な史料集の編集を諦め、その代りに「食貨半月刊」の第四卷第五期專刊（一九三六年八月）に「唐戸籍簿叢輯」を掲載したのであつた。そこに收録されたのは纔かに二〇點で、その内容は那波利貞「正史に記載せられたる大唐天寶時代の戸數と口數との關係に就きて」（歴史と地理、三三編、一九三四年）などですでに紹介されていたものの轉引にすぎなかつたが、籍帳原文の彙録の最初の試みとして、評價されるべき特集號なのであつた。この「唐戸籍簿叢輯」の發行後、ちょうど四半世紀を経過した一九六一年に、中國科學院歷史研究所資料室編『敦煌資料第一輯』が、北京の中華書局から出版され、翌々年、わが國で影印本が刊行された。これには、中國科學院圖書館や北京圖書館に蒐められた敦煌文書の寫眞やマイクロに主として頼つて戸籍類と契約文書が二百餘點集録されている。しかし録文や内容比定に不備誤脱がめだち、研究者が安心して依據できない出來榮えなのであつた。従前から戸籍・計帳を中心とする敦煌・トルファン出土古文書の蒐集・移録に銳意努めてこられた池田溫氏は、本書が出版されるや、紹介を兼ねて、綿密な補訂の文章を「東洋學報」四六卷一號に發表された。この時すでに池田氏は、唐代を中心とする現存の戸籍・計帳の類を自らの手で編集・刊行することを決意しておられたのであろう。一九六九年夏、ケンブリッジ大學シドニー・サセックス・カレッジの唐史コンファランスに出席した機會を利用して、ロンドンとパリ所在の文書原本を丁寧に見えたのであつた。同コンフ

フランスに出席のため先着していた筆者が、トウィチュット教授の車に同乗して池田氏をヒースロー空港に出迎えた際、稿本・ノート類を満載された別送の大型トランクが行方不明で、かなりの時間、空港内のあちこちを尋ね歩いたのも、今は懐しい思い出となった。

筆者らがやきもきしているのに、御當人が泰然としておられたのが印象に残っている。その日から一箇月餘、同じ下宿で寝食をともにし、史料蒐集にかける氏のなみなみならぬ情熱を身近かに感じたことであつた。歸國後、池田氏は、東洋文庫所藏寫眞を活用し、さらに原本閲覽の知見をもくわえて、當時しられるかぎりの籍帳原文をまとめて移録した「中國古代籍帳集録」（北海道大學文學部紀要、十九ノ四、一九七一年）を發表された。そこには、「敦煌籍帳」15點、「西州籍帳」49點、「差科簿」4點が3點の附録とともに集録されていた。この「籍帳集録」が發表されるや、ハーバード大學の楊聯陞氏が臺北の「食貨月刊」復刊第二卷第一期に批評紹介し、文書の目次の全文を轉載された。まさに國際的な關心をよび起したのである。

このたび東京大學東洋文化研究所報告、東洋文化研究所紀要別冊として出版され、東京大學出版會から市販された本書『中國古代籍帳研究——概観・録文——』は、前記の「中國古代籍帳集録」の改訂増補版としての色彩を濃厚にもつことは否めない。しかし、さきの「籍帳集録」がA5判二二〇頁分に對して、今回の「籍帳研究」がA4判で約六七〇頁、およそ六倍の分量になっていることから分るように、單なる改訂増補版ではないのである。『籍帳研究』刊行の意圖を確かめるには、やや長文に互るけれども、本書の「序」の一部を轉載するのが最も適當であらう。

今世紀に中國西陲の敦煌や吐魯番から發見された文書資料が、中國史研究にもたらす劃期的寄與は現在では學界周知の所であり、殊に戸口・公課・田土に關する各戸の記事を含む籍帳類は、最も直接に當代人民の實態と支配の志向を物語る根本資料となる。されば、この半世紀における唐前期を中心とする時期の公課制・兵制・田制をはじめ、法制・社會經濟史的研究の展開は、新發見籍帳類の分析利用にまつ所頗る大きかつた。

しかし敦煌・吐魯番文書が帝國主義列強諸探檢隊により各國に持出され、遠く離れた數箇所に分藏され整理編目も進まぬ状態におかれたことは、その活用を數十年間にわたり少なからず妨げてきた點も否定し得ない。さいわい二十年來のマイクロの普及によりこれら文書資料の研究條件は格段の改善を見、ことに日本の先學の努力により籍帳についてははばその全貌に見通しをつけることが可能となりつつある。同時に中華人民共和國における考古發掘・研究がめざましい進展をみせ、戰國秦漢の竹木簡や六朝隋唐の文書の新資料が續々發見され、秦漢の籍帳や、高昌國から唐代にかけての吐魯番地域の籍帳資料が著増してきた。今後同種の材料が更に多く發掘されることが充分期待され、近い將來文書類等一次史料による研究の深化が實現することは殆ど疑いの餘地がない。

そこで從來の諸研究の成果をとりまとめ、中國古代籍帳の概観を試みることと、現段階で可能な限り籍帳資料を彙録し廣汎な研究者の利用に供することが、學界に課された當面の任務ではなからうかと筆者は考える。

目下の所では現存籍帳資料は確かに量的質的に甚だ限られたも

のであり、たとえば日本の正倉院文書中の籍帳に比してもその價值に格段の差のあることは否定しがたい。けれども傳存文獻の豊富さに比し中國の一次史料の決定的乏しさは、僅少な遺存文書の歴史研究に占める相對的重要性を著しく高いものとする。そしていわば社會の細胞をなす個々の家を具體的に記錄する戶籍の有用性は、文書資料中でも拔群である。同時に籍帳も、同時代の他の諸文書と關連させてはじめて分析を深めることが可能となる面が少くない。その意味では敦煌・吐魯番文書は、文書群として包括的に整理研究が進めらるべきである。ただ本書はそのための第一歩として、戶籍・計帳・差科簿のほか、戶口・公課・田土に關連する諸問題の理解に有益な官文書・寺院文書を收録するとともに、帳簿類の發達を伺うに參考となる文書の若干を併せ集録した。

この序文から明瞭に伺がえるように、本書では、まず中國古代籍帳の(1)概観がなされ、つぎに前著「中國古代籍帳集録」編集後に新たに發見されたり公表された籍帳をも網羅した(2)籍帳錄文が提供されるときに、戶口・公課・田土に關連する官文書や寺院文書などの大量の(3)諸種文書錄文が移録されている。それらの移録に當つては、先人による移録の際の誤記が正された上、その旨が注記されている。しかも、一一六點に及ぶ文書寫眞が挿圖として加えられているのが特筆されるのである。

一三〇頁に垂んとする「概観」は、序章(一) 中國史の特質と籍帳、二 古代籍帳の發見と研究、第一章 古代籍帳制度の形成(一) 籍帳の源流、二 戰國・秦代の戶籍、三 漢代の簿籍、第二章

古代籍帳制度の變質(一) 魏晉南朝の戶籍、二 十六國時代の戶籍、三 北朝時代の籍帳、第三章 古代籍帳制度の完成と崩壞(一) 隋代の籍帳整備、二 唐代の造籍、三 開元敦煌籍に現れた檢括の痕迹、四 天寶敦煌籍に現れた偽濫傾向、五 敦煌差科簿の推移——丁中把握の弛緩、六 安史亂後の籍帳の壞廢傾向——大曆四年敦煌手實を手がかりとして)からなる。この概観は、從來の研究史を丁寧に跡づけるとともに、著者自身がすでに個別論文として公表されてきた創見を隨處に取入れて、痒い所へ手が届いた、見事な成果を生みだしている。例えば、第三章の三、「開元敦煌籍に現れた檢括の痕迹」は、本誌第三十五卷第一號掲載の「現存開元年間籍帳の一考察」を踏まえて敘述されている、といった按配なのである。

本書の中核をなす「錄文」の部分は、「籍帳・差科簿(一一七八)」と「諸種文書(七九—三二六)」に大別され、前者は更に「敦煌籍帳(一一一五)」「吐魯番籍帳(一六—七四)」「差科簿(七五—七八)」に細分されている。文書番號からも推察される如く、前者「籍帳集録」の補訂増補の部分たる「籍帳・差科簿」の錄文に對し、新たに附加された「諸種文書」の錄文の方が、およそ三倍もの分量を占めているのであって、さきに本書が「籍帳集録」の單なる改訂増補ではないと述べた通りなのである。前者の補訂増補の部たる「籍帳・差科簿」錄文についていえば、敦煌籍帳が15點、吐魯番籍帳が59點、差科簿が4點であつて、前著の集録に比べると、敦煌籍帳などがまったく増加をみないのに、吐魯番籍帳だけが10點増加していることになる(おそらく今後ともふえつづけるであらう)。増加した10點の内譯は、文書番號第一六・一九・二九の3點が、中華人民共和國における新出土文物、第三六・五六・五七の3點がベルリン所藏

でトマス・ティロ氏の論文によって紹介されたもの、第三四・六四の2點は大阪四天王寺の出口常順氏の所蔵にかかる藤枝晃編『高昌殘影』圖版篇の寫眞にもとづくのであり、第二七・六三の2點は、龍谷大學圖書館所藏文書の著者自身の調査にかかり、そのうちの第六三の場合は西嶋定生氏がすでに著録しておられるが、第二七は今回初めて紹介される文書ということになる。このような綿密な史料蒐集は、著者を措いて外に何人もなしえず、いかに永年にわたる勞苦の結晶であるかを如實に示している。

錄文目次では單に「諸種文書（七九—一二六）」と一括されている部分は、卷末の歐文目録によると、「漢代木簡（七九—一〇〇）」「高昌國文書を主とする六朝時代文書（一〇一—一〇八）」「初唐期文書（一〇九—一三八）」「盛唐期文書（一三九—二三九）」「敦煌吐蕃支配期文書（二四〇—二七一）」「晚唐・五代・初宋期文書（二七二—三一六）」にわけられることになる。これら諸種文書の中には、「一四 唐（七世紀後半?）」判集「三四 周長安三年（703）三月括逃使陳」「一五五 唐開元二〇年（732）三月瓜州・沙州給石染典過所」「二六五 唐開元二四年（736）九月岐州郿縣尉□期陳判集」といった、筆者が近年、個人的に關心を拂ってきた文書も含まれていて、少くとも筆者にとっては、本篇たる籍帳錄文もさることながら、參考篇にあたるこれら諸種文書の信頼するに足る錄文の提供を、居ながらにして受けえた學恩は、はかり知れないのである。

本書『中國古代籍帳研究』は、よく似た題名をもつ、岸俊男氏の『日本古代籍帳の研究』と對比することによって、その特色をあらわすことができよう。五〇〇頁に及ぶ『日本古代籍帳の研究』は、岸氏の『日本古代政治史研究』につづく、第二研究論文集であっ

で、最後に八頁からなる簡單な「現存古代籍帳一覽表」が附せられている。日本史の場合には、すでに『大日本古文書』『寧樂遺文』が編纂・刊行されていて、その學恩の上に、これらの緻密な研究論文の積み重ねが可能となったのであった。中國史の場合には『大日本古文書』『寧樂遺文』に該當する文書集がないため、「現存中國古代籍帳一覽表」の提示だけでは意味をなさず、「概観・錄文」という副題を添えた池田氏の勞作の出現をみたわけである。この文書集の刊行によって、南北朝隋唐時代の社會經濟史研究の一層の進展が學界に課されたことになる。

本書の紹介をおえるに當り、瑣末なことながら、一二注文めいたことを申し述べておくと、「概観」の内容は、籍帳・差科簿にかざられ、錄文の大半に及ぶ諸種文書についてはまったく解説されておられないが、一般讀者のためには、ごく簡単にでも觸れておいていただきたかった。また、仁井田陞氏の『唐令拾遺』の利用に際しては、附録に收められた「唐令拾遺採擇資料索引」の恩恵をつねに蒙っている筆者としては、本書の如き、最も信頼しうる史料集には、所藏機關・登錄番號順の簡單な資料索引が附せられていたら、の感を深くする。しかしこれらは、校費出版による年度内刊行という、今日の状況下では、おそらく無理な願望にすぎまい。このような手間のかかる書物を、年度内に完成・出版されたことに對し、著者をはじめ、關係者一同に深甚な敬意を捧げたい。

一九七九年三月 東京 東京大學  
東洋文化研究所 A4判 六六九頁